

# The Garden Party における構成と文体および主人公の心理的変遷

渋谷 義彦

## A Study of *The Garden Party*

—Structure, Style, and The Heroine's Mental Transition—

Yoshihiko Shibuya

### I 序

Mansfieldの短編小説の魅力の一つは人物とその周囲の抒情性に満ちた描写それ自体にあり、この点で彼女の作品は物語というよりは詩や絵画と共通するところがある。時には女性の怪し気なまた時には少女の純真で微妙な心の動きの描写においては抒情詩のようであり、生命を吹き込まれたかのような情感こもる自然の描写においては印象主義の絵画のようでもある。新しいというよりは親しみのある、それでいて意識されずにいた微細で曖昧な瞬時の経験を新たに追体験させることに、作家の意図があると云ってもよいであろう。それゆえ作品のプロットはきわめて短いか、*At the Bay*のようにほとんど無いに等しいものもある。プロットよりは心理をも伝える人物の精細な言動、彼らを取り巻く状況の鮮明な描写の方に関心があったのである。

人物（特に子供）や風景の鮮明な描写は感受性豊かな作者の天賦の才能によるとかたづけしてしまうのは容易である。しかし、プロット重視の小説の伝統に反して、主人公の劇的生涯などよりは、人生のごくありふれた断片に真理を暗示させる方法を見出し、しかも短編小説という新しい形式での彼女の野心的な作品とその文体には、いくつかの技巧とも呼べる特徴がある。それは例えば、作品の優れた構成、描出話法など話法の自由な駆使による心中の描写、イメージ豊かな平明で精細な文体、無駄のない文章、時制(tense)の巧妙な変換、暗示性や余韻などの面で工夫された表現などである。また、子供の描写において窺われる、いとも容易に子供の世界にもどれる彼女の才能、あるいはまた子供の世界に共通の行動や思考を選択しこれを簡潔な言葉として表現できる彼女の能力を技巧と結びつけることはできないが、虚栄、欲望、自己欺瞞、利己主義、倦怠、孤独などに慢性化している大人の世界を子供の無垢な目で捉えることは風刺的視点の導入であり、一つの技巧と呼んでもよいであろう。その外にも技巧的に優れた点が数多くある。彼女が作品の推敲にいかに入念であったかが、1921年1月17日に義弟 Richard Murry へ宛てた次の書簡に窺えるのである：

It's a very queer thing how *craft* comes into writing. I mean down to details. *Par example*. In *Miss Brill* I choose not only the length of every sentence, but even the sound of every sentence. I choose the rise and fall of every paragraph to fit her, and to fit her on that day at that very moment. After I'd written it I read it aloud —numbers of times— just as one would *play over* a musical composition —trying to get it nearer and nearer to the expression of Miss Brill— until it fitted her.... If a thing has really come off it seems to me there mustn't be one single word out of place, or one word that could be taken out. That's how I AIM at writing. It will take some time to get anywhere near there.<sup>(1)</sup>

このように Mansfield は技巧に関しては、常に自己錬磨を怠ることがなかった。<sup>(2)</sup>その反面、彼女には不満足のまま未完のままに放棄されてしまったものも多くあることから、その衝動的な性質も鑑み、Nariman Hormasji は次のように述べている：

No doubt Katherine Mansfield was a conscious practitioner of her art, and her craftsmanship was hard-won. Yet whatever she wrote, she wrote spontaneously and instinctively like an inspired artist. It may be said that she was deliberate in her choice of the material, but she wrote what she could on the spur of the moment, in a moment of inspiration, under the guidance of her instinct.<sup>(3)</sup>

傑作の一つである *The Garden Party* (以後 GP と略す) においても、園遊会の催しをめぐる人物達の細やかな心中を窺わず言動およびその周囲の描写に作品の価値を見いだすことができる。しかしこの作品ではそのような文体的特徴の外にある程度の物語性が要求されている。すなわち園遊会の行われたその日の朝から晩までの短い間に、近くに住む馬車引きの事故死を知ることで、少女 Laura の心に何が生じたかの問題である。またこれとの関連でいくつかの作品構成上の配慮を窺い知ることができる。本稿ではこの作品の構成と文体的特徴および主人公 Laura の心理的変遷について考察したい。

## II 構 成

この短編小説のプロットは短く、裕福な Sheridan 家で催される園遊会の日の朝から晩までの出来事である。朝、庭では人夫達によるテントの設営が行われ、家の中では来客を向かえる準備で慌ただしい。準備も整った頃、ふとしたことで近くの貧民窟に住む Scott という馬車引きが事故死したことが知らされ、残された家族への配慮から園遊会中止の提案が Laura から出される。しかし結局はそれが姉妹 Jose や母から非常識であると否定されてしまい、午後になって園遊会は予定通り行われる。園遊会后父が死んだ Scott の家庭に意外な同情を示したことで、母の提案により、Laura が園遊会で残った料理を Scott の家族のいる家に届けることになる。夕園迫る頃、Laura はその家に行き、悲しみの中にある Scott 夫人をして Scott の死顔を見るのである。

作品全体は、園遊会が催される Sheridan 家の庭園を中心とした世界と事故死した馬車引きが安置されている貧民窟の世界という全く対照的な「陽」と「陰」の二つの世界からなる。この二つの世界を移動する Laura の心の変化の大部分は彼女の言動や前後の文脈によって暗示されたままであるが、これらが読者によって推測されるように作品が編まれていることに気づくのである。巧みに配置されたいくつか作品の構成部分についてここでは考えてみたい。

最初の「陽」の世界において、園遊会用のテントを張りにきた人夫達と Laura が出会う場面がこの作品の理解を助ける大きな役割を果たしている。Mansfield はこの場に作品全体を理解するのに必要な情報をそれとなく盛り込んでいる。Laura に関する情報としては主に次のことが挙げられる：

- 1) 彼女が育った上流階級の慣習やしつけとこの型にはまらない彼女の性格：

It's so delicious to have an excuse for eating out of doors....<sup>(4)</sup> ; She... tried to look severe and even a little bit short-sighted as she came up to them. 'Good morning,' she said, copying her mother's voice. But that sounded so fearfully affected that she was ashamed, and stammered like a little girl, 'Oh - er - have you come - is it about the marquee?'<sup>(5)</sup> ; Laura's upbringing made her wonder for a moment whether it was quite respectful of a workman to talk to her of bangs slap in the eye. But she did quite follow him.<sup>(6)</sup>

- 2) Laura はむしろ素朴で人間的な下層階級の人間に好感を持ち、彼らから特別視されることを嫌う。また階級差別については反対であったこと：

They carried staves covered with rolls of canvas, and they had big tool-bags slung on their backs. They looked impressive<sup>(7)</sup> ; How very nice workmen were!<sup>(8)</sup> ; How many men that she knew would have done such a thing. Oh, how extraordinarily nice workmen were, she thought. Why couldn't she have workmen for friends rather than the silly boys she danced with and who came to Sunday night supper? She would get on much better with men like these<sup>(9)</sup> ; 'Matey!' The friendliness of it, the - the - just to prove how happy she

was, just to show the tall fellow how at home she felt, and how she despised stupid conventions, Laura took a big bite of her bread-and-butter as she stared at the little drawing. She felt just like a work-girl.<sup>(10)</sup>

これらの情報がここでさりげなく与えられていることによって、事故死した Scott の家庭を同じく同情しながら何故彼女の考えが Jose や Mrs Sheridan と異なるのか、あるいはまた何故 Scott の安らかな死顔に感動し、派手な服装を詫びるのが理解できる。彼女は Jose や母に較べて下層階級の人間に対し軽蔑的な偏見をそれほど強く持っておらず、彼らの持つ人間的魅力を十分に評価できる人物として描かれているのである。

その後 Mansfield はこれらの情報提供のための余計な繰り返しはできるだけ避けているのである。短編小説の短いという性質は凝縮と省略を余儀なくし、作品の各部分の持つ意味の量がそれだけ増すことになる。しかしこの作品ではこの意味の過多が重々しく感じられることはない。Mansfield は読者の常識と想像力にその多くを無理なく委ね、あくまでも少女の行動として自然な描写だけを残している。それゆえに、作品を何度か読んでいるうちに、必要な情報が説明的な情報としてではなく、人物の行動の中に生きた情報として存在することに気づくのである。

園遊会の前に練習する Jose の歌もまたその後の作品の展開を考えれば、作品の構成上の意義のあるものとなる：

This Life is Wee-ary,  
A Tear-a Sigh.  
A Love that Chan-ges,  
This Life is Wee-ary,  
A Tear-a Sigh.  
A Love that Chan-ges,  
And then ... Good-bye!  
.....  
This Life is Wee-ary,  
Hope comes to Die.  
A Dream-a Wa-kening.<sup>(11)</sup>

愛も希望もはかなく果てるこの世を憂える歌である。内容の悲しさはこの作品を構成する二つの世界の中、第二の暗い貧民窟の「陰」の世界と共通である。この歌が第一の「陽」の世界の中で、しかもまだ事故死の知らせもない段階で歌われることは、コントラストによってこの場の楽しい雰囲気を実際立たせる効果がある外に、この歌が後に起こる悲しい出来事の兆しとしてあることにもなる。さらにまた、その歌われ方も事故死に対する Jose や Mrs Sheridan の反応と対応するものである：

*Pom! Ta-ta-ta Tee-ta!* The piano burst out so passionately that Jose's face changed. She clasped her hands. She looked mournfully and enigmatically at her mother and Laura as they came in....

But at the word 'Good-bye', and although the piano sounded more desperate than ever, her face broke into a brilliant, dreadfully unsympathetic smile.  
'Aren't I in good voice, mummy?' she beamed.<sup>(12)</sup>

園遊会が近づいている楽しい雰囲気の中では、この物悲しい歌も気分を込めて歌われたにしても、結局は茶化される対象になったに過ぎない。喜びと悲しみがいかに両立し難いか。喜びの中での悲しみへの同情 (sympathy) には所詮限りがある。このようなことが歌の挿入によって暗示されているのではないだろうか。これは Laura の視点から見た Jose と Mrs Sheridan の事故死に対する態度と同じである。この場の 'a brilliant, dreadfully unsympathetic smile' は、その 'unsympathetic' という言葉の面からも、以下の Jose や Mrs Sheridan の発言とアイ

ロ＝ックに結びついていくのである：

'I'm every bit as sorry about it as you. I feel just as *sympathetic*.' (Jose)<sup>(13)</sup>

'What's the matter with you to-day? An hour or two ago you were insisting on us being *sympathetic*, and now——'(Mrs Sheridan)<sup>(14)</sup>

(イタリックは筆者)

事故死した男の家族に対して示す Jose や母の同情 (sympathy) が自分のとは根本的に異なっているようだ、下層階級への偏見を持たぬ Laura は考えるのである。彼女達にとって下層階級に対する同情は、階級差別を意識しながら上から下へ哀れみを垂れることであり、Laura にとっては人間として対等に痛みを分かち合うことなのである。

GP には人物や状況の客観的描写という一般的な役割以外にも、narrator がより主観的な意見を述べ、同時に貧民窟と Sheridan 家とのこれまでの関係を説明する箇所がある。作品に不意に挿入されたこの説明的な箇所もまた作品の構成上独特の役割を担っている。園遊会中止の Laura の提案に対して Jose はそれが無茶な話であることを主張する。これに対しての Laura の反論の後に、narrator はむしろ Jose 側を弁護する。この箇所からは、Laura の視点からの見方がかならずしも絶対ではないこと、彼女にはまだ処世術を知らない未熟さが残っていること、それゆえ彼女の言動についてはこれを差し引いて考える必要があることが示唆されているようである：

'Nobody expects us to. Don't be so extravagant.' (Jose)

'But we can't possibly have a garden-party with a man dead just outside the front gate.' (Laura)

That really was extravagant, for the little cottages were in a lane to themselves at the very bottom of a steep rise that led up to the house.... They were the greatest possible eyesore, and they had no right to be in that neighborhood at all. (narrator)<sup>(15)</sup>

(括弧内は筆者)

主人公の考えが常に正しいわけではない——もっとも narrator の意見も常に正しいわけではないが——。少なくともここで作者は少女の思考の限界を意識させるのである。

同時にまたこの箇所では、小さい頃 Sheridan 家の子供達は悪い言葉やその他の影響を受けないように貧民窟への出入りを禁じられていたが、大きくなってからは、Laura と兄の Laurie だけにはその貧民窟の生活を知ろうとする意識があらかじめあって——'But still one must go everywhere; one must see everything.'<sup>(16)</sup>——、何度かその場所を通り抜けたことがあったことが述べられるのである。この二人の共通の経験は、この作品の最後において Laura が人生について何かを言おうとした際に、Laurie が彼女の気持ちを理解できる人物であることを示す布石になっているのである。

### III 文 体

主人公 Laura の微妙な心の変化を臨場感を伴って直接的にまた暗示的に伝えるのに役立つものの一つに、Mansfield の独特の話し法の操作がある。Mansfield はいわゆる描出話し法の外にも不完全直接話し法(引用符を省略した直接話し法)とも呼べるような話し法の操作、さらにはこれらとの関係においての人称や時制の変化などによって、心の中を見事に描写している。これらの話し法は即座に人物の心中に読者を引き込み、臨場感を生み出すと共に、引用符や伝達部分の省略による迅速さによって、人物の俊敏さや相手への気遣いや思いやりの性質までも伝えることができる。次にいくつかの特徴を挙げたい。

園遊会に呼ぶ楽団の件での人夫達と Laura の会話の場面では直接話し法と描出話し法が使われている：

'H'm, going to have a band, are you?' said another of the workmen. He was pale. He had a haggard

look as his dark eyes scanned the tennis-court. *What was he thinking?*

'Only a very small band,' said Laura gently. *Perhaps he wouldn't mind so much if the band was quite small.*<sup>(17)</sup>

(イタリックは筆者)

二人の会話は直接話法だが、Laura の心中は描出話法で表されている。Laura の心中のみならず、人夫に対する不安と緊張、機転なども同時に伝えられる。

また心中を表すために不完全直接話法が使われる場合もある。Laura が帽子をかぶったかわいい自分の姿を鏡で見たとき、園遊会停止の考えも揺らいでしまう：

Never had she imagined she could look like that. *Is mother right?* she thought. And now she hoped her mother was right. *Am I being extravagant? Perhaps it was extravagant.*<sup>(18)</sup>

(イタリックは筆者)

読者は人称と時制の変化によって瞬時に Laura の意識の中に放り込まれるのである。

さらにまた、これらの話法が主人公以外の心中の描写に使われる場合もある：

An awkward little silence fell. Mrs. Sheridan fidgeted with her cup. *Really, it was very tactless of father....*<sup>(19)</sup>

(イタリックは筆者)

意外にも Scott の家族に同情した Mr Sheridan の言葉によって Laura に対しての面目がなくなった Mrs Sheridan の心中が表されている。あるいはまた他の人物の心中を主人公が推し量ったものを表していることもある：

She seemed as though she couldn't understand why Laura was there. *What did it mean? Why was this stranger standing in the kitchen with a basket? What was it all about?*<sup>(20)</sup>

.....  
*Happy...happy.... All is well, said that sleeping face. This is just as it should be. I am content.*<sup>(21)</sup>

(イタリックは筆者)

最初の例は見知らぬ Laura の不意の訪問に戸惑う Scott 夫人の心中を描出話法で、次の例は死んだ Scott 氏の心中を不完全直接話法でそれぞれ表している。それぞれの話法においては人称と時制が巧みに変えられている。

臨場感はまたイメージ豊かな Mansfield の文体によってもたらされている。例えば、園遊会の準備が着々と進んでいく家の中の様子を Laura の感覚を通してこう描写している：

She was still, listening. All the doors in the house *seemed to be open*. The house *was alive with soft, quick steps and running voices*. The green baize door that led to the kitchen regions *swung open and shut with a muffled thud*. And now there came a long, *chuckling absurd sound*. It was the heavy piano being moved on its stiff castors. But the air! If you stopped to notice, *was the air always like this?* Little faint winds were playing chase in at the tops of the windows, out at the doors. And there were *two tiny spots of sun, one on the inkpot, one on a silver photograph frame, playing too*. Darling little spots. Especially the one on the inkpot lid. It was quite warm. *A warm little silver star*. She could have kissed it.<sup>(22)</sup>

(イタリックは筆者)

ここでは、擬人法の外に、視覚的、聴覚的、触覚的イメージという異なった種類のイメージが豊かに用いられており、活気ある家の中の様子と胸弾む Laura の心中が見事に描写されている。

このようなイメージ豊かな文体はまた、この作品を構成する「陽」と「陰」の二つの世界の差をイメージの面から際立たせている。次の描写は Laura がこれから貧民窟に向かう場面である：

It was just *growing dusky* as Laura shut their garden gates. A big dog ran by *like a shadow*. The road *gleamed white*, and down below in the hollow the little cottages *were in deep shade*. How quiet it seemed after the afternoon. Here she was going down the hill to somewhere where a man lay dead, and she couldn't realize it. Why couldn't she? She stopped a minute. And it seemed to her that *kisses, voices, tinkling spoons, laughter, the smell of crushed grass were somehow inside her*. She had no room for anything else. How strange! She looked up at the pale sky, and all she thought was, 'Yes, it was the most successful party.'<sup>(23)</sup>

(イタリックは筆者)

華やかな園遊会の終わりが花の隠喩で表されたのに対して (And the perfect afternoon slowly ripened, slowly faded, slowly its petals closed.<sup>(24)</sup>)、第二の「陰」の世界は、限定された視覚的イメージによって、色彩を排除した白黒の世界に描かれている。しかしこの中で、Laura の頭の中にはまだ楽しい園遊会のざわめきが名残惜しく残っており、ここだけは特に聴覚的、臭覚的イメージで周囲と異質に描かれているのである。またすぐ後には、この薄暗い世界で彼女のドレスと帽子がひときわ目立ってしまうのである (How her frock shone! And the big hat with the velvet streamer...<sup>(25)</sup>)。

このように Mansfield はイメージの種類や質を工夫し、読者の想像力によって五感にうったえ、彼女の描く世界を読者に追体験させているのである。

#### IV Laura の心理的変遷

園遊会が行われた日の朝から晩の短い間に、少女 Laura の心に実際に何が生じたのか、事故死した馬車引きの死顔を美しいとまで思う心理的変遷がそこにあったのであろうか、これらの大部分は最後の Laura の言葉 'Isn't life... isn't life...'<sup>(26)</sup> とともに行間に暗示されたままなのであり、読者の推測に任されている。

一般に、Mansfield の短編では、「実際に書かれていることよりはるかに多くの事が暗示によって伝えられている。」「<sup>(27)</sup>人物の性格描写や精神的な変化などは、婉曲にしかも簡潔に人物の言葉や行動で暗示されている。また例えば GP の冒頭の言葉、'And after all the weather was ideal'<sup>(28)</sup> のように、簡潔な言葉によって園遊会が予定されていたこの日の天候状態がいかに気がかりであったかや、この日がいかに楽しみにされていたか、などの言外の状況を暗示する表現も多い。それゆえに、Laura の精神的な変化の大部分もまた彼女の行動から推測しなければならないのである。この作品の短いプロットにそって主なる彼女の心の変化を探ってみたい。

園遊会に先立ちテント設営にきた人夫達との会話や行動から彼女について何がわかるかは先にも述べた。この場面では、彼女が上流階級の家庭で生まれ教育を受けながらもその型にはまっていないこと、さらに彼女は素朴で人間的な下層階級の人間に好感を持っており、下層階級に対しての軽蔑的な偏見はなく、階級差別には反対であることが示されている。そして、この場面はその後の彼女の言動を説明するうえで重要になってくる。

上流階級の生活そのものが Laura の性分に合わないことの暗示が繰り返されている。例えば、'It's so delicious to have an excuse for eating out of doors...'<sup>(29)</sup> では、彼女が家の外で物を食べていけないというしつけをされているが、このしつけに縛られていないことが暗示されている。これはすぐ後に気さくな一人の人夫への同胞意識を示すためのパタ付きパンの丸かじりへとつながるのである。また、彼女はこれら人夫達に話しかけるのに、最初は母親の態度の真似をする：'She tried to look severe and even a little bit short-sighted...'<sup>(30)</sup> さらには母の声色を遣って挨拶するが、それは 'fearfully affected'<sup>(31)</sup> に聞こえ、恥ずかしくなってしまうのである。上流階級の家庭でのしつけによって当然ながら下層階級に対する軽蔑的な偏見が生まれる。しかし Laura にはこれが始

めから疑わしいものとして受け入れられていたようだ。また、Laura 自身が積極的に人夫達に近づこうとする態度、同等に扱われたいという傾向がみられる：

Laura's upbringing made her wonder for a moment whether it was quite respectful of a workman to talk to her of bangs slap in the eye. But she did quite follow him.<sup>(32)</sup>

また、ラベンダーの小枝を折ってその臭いを嗅いでいる人夫を見たときにもこれに感動し彼女は思うのである：‘Oh, how extraordinarily nice workmen were...’<sup>(33)</sup>同じ上流階級の少年らよりずっと気が合うと考えるのである。人夫の一人が、‘Are you right there, matey?’<sup>(34)</sup>と呼ぶと彼女は、その親しみある呼掛けに大変にうれしくなるのだ。行儀の悪さを気にすることなく堂々とパタ付きパンをかじりながら、自分も‘a working girl’<sup>(35)</sup>になった感じさえするのである。Laura には、階級差別が愚かしいものであること、人間は本来平等であることの信念が、未熟ながら、あらかじめあったと考えられる。素朴で気さくな、意外にも気持ちの細やかな人夫達との出会いで彼女はこの考えにさらに自信を持つのである。

彼女のこの信念が揺らぐことになるのは、馬車引きの事故死の知らせで園遊会の中止を思い立ち、これに反対された時である。最初彼女は Jose や母もまた当然彼女と同じ考えであると考えたのである。それゆえ彼女の無茶な提案に驚いた Jose に、‘Why did Jose pretend?’<sup>(36)</sup>と自問するのである。彼女はパーティー中止は無茶だという Jose に対して反論するが結局口論となり結論は出ないのである。

その後 Laura は母親に意見を聞きに行くが、母親もまた Jose と同じ態度であった：

If someone had died there normally-and I can't understand how they keep alive in those poky little holes-we should still be having our party, shouldn't we?<sup>(37)</sup>

Laura は園遊会を開くという母の意見を承諾せざるを得なかったが、母親の言うことはまったく間違っており‘terribly heartless’<sup>(38)</sup>だと思うのである。

Laura にとっては、馬車引きの家族もおよそ隣人なのだ：‘They'd hear us, mother; they're nearly neighbours!’<sup>(39)</sup>そしてこの考えは、人夫との出会いの場面の考えとも一致している。Jose や母の軽蔑的な言葉には、階級差別の意識がはっきり窺えるのである。Jose や母が正しいのか、自分が正しいのか、今少女 Laura の頭の中にはどちらかしかないのである。前者を認めることは、彼女らに共通する階級差別を容認することにつながるのである。

だが、母が園遊会用に用意した美しい帽子をかぶったかわいい自分の姿を鏡で見て、少女 Laura の気持ちも揺らぐのである：

Is mother right? she thought. And now she hoped her mother was right. Am I being extravagant? Perhaps it was extravagant. Just for a moment she had another glimpse of that poor woman and those little children, and the body being carried into the house. But it all seemed blurred, unreal, like a picture in the newspaper. I'll remember it again after the party's over, she decided. And somehow that seemed quite the best plan...<sup>(40)</sup>

この Laura の心中の描写には、楽しい園遊会への期待が Laura の心中に広がっていき、それと同時に馬車引きの悲しい事故の衝撃が弱まって行くことがわかる。結局園遊会が終わったらもう一度思いだすことが最も良い方法だと考えるにいたるのである。

しかしこの現実逃避のためらいが、帰宅した Laurie にもう一度尋ねようとするところに暗示されている。しかし Laurie が彼女の帽子を褒めたことで、彼女は尋ねる機会を逃してしまうことになるのである。

こうして楽しい園遊会は始まるが、彼女にとっては、本来の信念に背いて Jose や母の階級差別意識を容認して

しまっているわけで、このある種の罪悪感はその後の彼女の行動の自信のなさに現れてくるのである。

賓客が次々と訪れ園遊会が始まり、Laura もそのもてなしで忙しいが、描出話法による彼女の視点からの状況描写や感想には、この楽しみに完全に没入したいが没入りきれないでいるといった彼女の微妙な気持ちが暗示されているのである：

Wherever you looked there were couples strolling, bending to the flowers, greeting, moving on over the lawn. They were like bright birds that had alighted in the Sheridans' garden for this one afternoon, on their way to - where? Ah, what happiness it is to be with people who all are happy, to press hands, press cheeks, smile into eyes.<sup>(40)</sup>

‘on their way to - where?’からも暗示されるように、彼女はこのような楽しみは一時的な気休めに過ぎないものであるかのように感じている。また、「幸福な人々」とあえてここで考えるのは、不幸な人々への思いが心の片隅にあるからなのである。Laura はこの華やかで賑やかな園遊会の状況に完全には融け込めないでいる。馬車引きの事故死を聞く前の彼女は園遊会の準備が進みつつあるだけでもすでにしゃいでいた——例えば、Laurie に駆け寄って彼を軽く抱きしめ、‘Oh, I do love parties, don't you?’<sup>(42)</sup>とあえぎながら言うのだった——、だがこの時の彼女の観察には哀感が込められている。Mansfield は暗示の手法で Laura の心の中を Laura 自身気づかぬうちに変えてきているのである。

園遊会が首尾よく終わる。園遊会前の親子の論争など何も知らぬ父が事故について聞いていたかと家族に尋ねたのをきっかけにして、再び馬車引きの話題になってしまう。母が園遊会の残り物をプレゼントにする考えを名案として披露するが、Laura だけがそれが名案だとは同意できない。

ここでも階級差別意識の違いによる差があらわれる。下層階級に対する同情は、母にとっては目下の者に哀れみを施すことであり、Laura にとっては人間として対等に痛みを共有することである。それゆえ Laura は残り物を籠に詰めて持参することなど無礼であると感じるのである：‘To take scraps from their party. Would the poor woman really like that?’<sup>(43)</sup> だが今や自信を失っている Laura は不本意ながらも母の言うがままに貧民窟の死んだ男の家に向かうのである。

園遊会の賑やかな気分も抜けぬまま、Laura は貧民窟を訪れ、死んだ男の家を捜す。そのうちに、派手なドレスとビロードの飾りリボンのついた大きな帽子があまりにも場違いであることが気になりだす。近所の不幸を顧みず自らも園遊会に加わったことから生ずるある種の罪悪感がこれらの物によって象徴的に表わされている。母に言われるままに来てしまったが、今これを後悔している。その後、Scott の死顔を見るまでの彼女の一連の行動は実に臆病で消極的に描かれている。例えば、次のような描写である：

Were the people looking at her? They must be. It was a mistake to have come ; she knew all along it was a mistake. Should she go back even now?<sup>(44)</sup> ; It was as though she was expected, as though they had known she was coming here. ... Oh to be away from this! ... I'll just leave the basket and go, she decided. I shan't even wait for it to be emptied<sup>(45)</sup> ; Laura only wanted to get out, to get away.<sup>(46)</sup>

やがて Scott 夫人の姉妹に案内されるがままに、目を泣き腫らしてひどい顔をした夫人に会い、別の部屋で Scott の死顔を見ることになる。彼女の心に大きな変化が起こり、自信すら生じることになるのがこの瞬間なのである：

There lay a young man, fast asleep - sleeping so soundly, so deeply, that he was far, far away from them both. Oh, so remote, so peaceful. He was dreaming. Never wake him up again. His head was sunk in the pillow, his eyes were closed ; they were blind under closed eyelids. He was given up to his dream. What did garden parties and baskets and lace frocks matter to him? He was far from all those things. He was wonderful, beautiful. While they were laughing and while the band was playing, this marvel had come to the lane. Happy...happy... All is well, said that sleeping face. This is just as it should be, I am

content.<sup>(47)</sup>

事故死を示す様な痕跡は何もなく、男は眠って夢でも見ているかのようであった。不幸な事故、顔を泣き腫らした夫人、夕暮れの貧民窟、このような暗い雰囲気に対して、その死顔は意外にも穏やかであり、幸福そうであり、その日 Laura が体験した喜びと悲しみそしてこれらの狭間での感情的葛藤に対してそれは超然とした様子であった。人生の喜びや悲しみなどが何等の影響も与えることのできないまったく異なった不思議な世界がそこにあった。少女としては堪えがたい苦悩の中にあつた Laura にとって、これらの苦悩から完全に開放されて満足するような男の顔はすばらしく、美しくすら見えたのである。喜びや悲しみに翻弄される人間の哀れを感じ、同時にそのような人間に階級差など本来ないことを思うのである。この不思議が園遊会の庭にはなくまさにこの貧民窟に起きたことでさらにその意識を強くする。本来階級差別を否定していた Laura は失いかけていた自分の信念への自信をここで取り戻すのである。階級差別意識を持たない Laura であるがゆえにこのように感ずることができたことは明かである。この一連の心の変化は、折ったラベンダーの小枝の臭いを嗅いだ人夫の意外な人間らしさ、繊細さに感動し、階級差別意識の誤りを強く確認した彼女の心の変化と同じものであり、人夫との出会いがこの場の布石となっているのである。

Laura は泣きながら、ある種の罪悪感から、死人に詫げるのである：‘Forgive my hat.’<sup>(48)</sup> しかし自信を取り戻した Laura の態度の変化、すなわちそれまでとは対照的な彼女の積極性が、Mansfield の簡潔な文体によってそれとなく描写されている：

And this time she didn't wait for Em's sister. She found her way out of the door, down the path past all those dark people.<sup>(49)</sup>

この作品は暗示的表現に満ちているが、終わり方もまた暗示的である：

‘Isn't life,’ she stammered, ‘isn't life –’ But what life was she couldn't explain. No matter. He quite understood.

‘Isn't it, darling?’ said Laurie.<sup>(50)</sup>

すばらしい死を見た Laura はまた同時に、喜びや悲しみ、虚栄心、階級差別などに翻弄される人間の宿命について考えざるを得なかったろう。しかしまた同時に、人生は少なくとも人間の平等を約束しており、Laura の期待を裏切らないものようであった。このような人生をまだ未熟な少女 Laura は驚きと希望の中で言葉に表すことができなかったのではないだろうか。

## V 結 び

以上のように、GP は文体のみならず構成においても、作者の十分な配慮がなされている。文体においては、特に主人公 Laura のその時々様々な感情が細やかに描写されているが、その中に一連の心理的変遷を迎えることができる。さらに Mansfield は彼女の心理的変遷に関わる情報を適当な場所にそれとなく配置している。これによって、読者は自らの想像力を無理なく働かし、作品の意味の構築に参加するのである。描出話法や不完全直接話法さらには様々な種類のイメージの駆使もまた、臨場感を高めており、これもまた読者の追体験を促すものである。文学の役割はある経験に関する知識を伝えることにあるのではなく、想像力を介して読者にある経験を追体験させることにある。<sup>(51)</sup> Mansfield は新しい経験を描くというよりはむしろごくありふれた経験を鮮明に拡大して描き、経験を広めるのではなく経験を深める方法で、読者の追体験を促している。

Jose や母の選択が正しかったのか Laura の提案が正しかったのかの本当の解答は、いかに narrator が前者を弁護しようとする作品ではなされていない。Jose や Mrs Sheridan の述べた理由は現実的であり、そこに処世術が窺われるとはいえ、階級差別意識が歴然としており、適切なものとしては描かれていない。後に、Mrs Sheridan

が Scott の家族へのプレゼントを提案するのは、ある種の罪悪感からである。だからといって Laura の園遊会停止の提案が正しいということも暗示されていない。彼女の提案はやはり 'extravagant' であり、非現実的なままなのである。この作品では、Jose や Mrs Sheridan の行動は常識として容認されているが、その上流階級の常識の中にある階級差別意識がいかに薄情なものであるかが、まだこの常識に汚染されていない純無垢な少女の目を通して示唆されているのである。

註

(1) *The Letters of Katherine Mansfield*, ed. J. Middleton Murry, (Howard Fertig, 1974), pp. 360-361.

(2) Mansfield は Richard Murry に次のような書簡も送っている：

J. (John Middleton Murry) told me you were working at technique. So am I. It's extraordinarily difficult - don't you find? My particular difficulty is a kind of fertility - which I suspect very much. It's not solid enough. But I go at it every day. It's simply endlessly fascinating.

*Ibid.*, p. 387. (括弧内は筆者註)

(3) Nariman Hormasji, *Katherine Mansfield - An Appraisal* -(Auckland, Collins, 1967), pp. 97.

(4) Antony Alpers, ed., *The Stories of Katherine Mansfield* (Auckland, Oxford U. P., 1984), p. 487. *The Garden Party* からの引用はすべてこの全集からのものである。

(5) *Ibid.*, pp. 487-488.

(6) *Ibid.*, p. 488.

(7) *Ibid.*, p. 487.

(8) *Ibid.*, p. 488.

(9) *Ibid.*, pp. 488-489.

(10) *Ibid.*, p. 489.

(11) *Ibid.*, p. 491.

(12) *Loc. cit.*

(13) *Ibid.*, p. 494.

(14) *Ibid.*, p. 497.

(15) *Ibid.*, p. 493.

(16) *Ibid.*, p. 494.

(17) *Ibid.*, p. 488.

(18) *Ibid.*, p. 495.

(19) *Ibid.*, p. 496.

(20) *Ibid.*, p. 498.

(21) *Ibid.*, p. 499.

(22) *Ibid.*, pp. 489-490.

(23) *Ibid.*, p. 497.

(24) *Ibid.*, p. 496.

(25) *Ibid.*, p. 497.

(26) *Ibid.*, p. 499.

(27) Willa Cather の言葉。彼女は、次のように述べている：

'She communicates vastly more than she actually writes. One goes back and runs through the pages to find the text which made one know certain things about Linda or Burnell or Beryle, and the text is not there-but something was there, all the same - is there, though no typesetter will ever set it. It is this overtone, which is too fine for the printing press and comes through without it, that makes one know that this writer had something of the gift which is one of the rarest things in writings, and quite the most precious.'

Willa Cather, *Not under Forty*, (New York, 1967), pp. 137-138.

(28) *The Stories of Katherine Mansfield*, *op. cit.*, p. 487.

(29) *Loc. cit.*

- (30) *Loc. cit.*
- (31) *Ibid.*, p. 488.
- (32) *Loc. cit.*
- (33) *Ibid.*, 489.
- (34) *Loc. cit.*
- (35) *Ibid.*, p. 493.
- (36) *Loc. cit.*
- (37) *Ibid.*, p. 494.
- (38) *Loc. cit.*
- (39) *Loc. cit.*
- (40) *Ibid.*, p. 495.
- (41) *Ibid.*, pp. 495-496.
- (42) *Ibid.*, p. 489.
- (43) *Ibid.*, p. 497.
- (44) *Loc. cit.*
- (45) *Ibid.*, pp. 497-498.
- (46) *Ibid.*, p. 498.
- (47) *Ibid.*, pp. 498-499.
- (48) *Ibid.*, p. 499.
- (49) *Loc. cit.*
- (50) *Loc. cit.*
- (51) Laurence Perrine, *Sound and Sense-An Introduction to Poetry* -, Fourth edit. (Harcourt Brace Jovanovich, Inc., New York, 1973), P. 6.

Perrine は次のように述べている :

Literature... exists to communicate significant experience-significant because concentrated and organized. Its function is not to tell us about experience but to allow us imaginatively to participate in it. It is a means of allowing us, through the imagination, to live more fully, more deeply, more richly, and with greater awareness. It can do this in two ways : by broadening our experience-that is, by making us acquainted with a range of experience with which, in the ordinary course of events, we might have no contact-or by deepening our experience - that is, by making us feel more poignantly and more understandingly the everyday experiences all of us have.